

(氏名) 藤田哲也

著書、学術論文、学会発表等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著 書) (1)『しあわせな明日を信じて 2 一乳児院・児童養護施設の子どもたち3年後の便りー』	共 著	2012年4月	福村出版	(全体概要)平成20年『しあわせな明日を信じて』と題して、施設で生活していた当時の思いや実態を当事者の視点からまとめ課題を浮き彫りにしていた。その後同じ当事者が3年間を振り返ってどのように感じているかをまとめたもの。 (担当部分概要) p.236-240 第4章「社会的養護への提言」 退所後支援が必要と考えられる4点(①専門的職員の配置②手厚い自立援助③進学への経済的な保障④集える場所の確保と職員同士のつながり)を現場の視点から提言という形でまとめた。
(2)『外国人の子ども白書～権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から～』	共 著	2017年4月	明石書店	(全体概要)日本における外国人の子どもの教育・権利・生活保障の現状と課題、取り組みなど、各分野から紹介したもの。 (担当部分概要) p.213-215 支援の現場3『児童福祉施設と外国人の子ども達』外国人児童の入所経緯や生活実態、自立への取り組み等調査結果を基に問題を浮き彫りにし、生活文化の多様性を理解しながら支援につなげていく必要性を述べた。
(3)みらい×子どもの福祉ブックス「社会的養護」	共 著	2017年11月	株式会社みらい	(全体概要)保育士養成必修科目社会的養護のテキストとして発刊。 (担当部分概要)chapter 8 p.144-159「社会的養護に関わる専門職・専門機関と倫理」社牡蠣的養護に携わる職員と関係機関についてまとめた。また section4では調査結果をもとに、子どもの視点から『よい職員』の具体像を記述し学生にも理解しやすい内容とした。

<p>(学術論文) (1)「子どもの目から見た児童養護施設の生活に関する研究—子どもが『来てよかった』と思える施設づくりに向けて—」</p>	<p>単 著</p>	<p>2011年3月</p>	<p>日本福祉大学 大学院修士論文 (学位論文)</p>	<p>施設職員の存在は子どもの生活や子どもの思いに肯定的な影響を与えるかどうかについて、児童福祉施設で生活している子ども調査をもとに分析した。その結果、職員に対して肯定的な印象を持ち、施設生活が楽しいと感じている場合には、施設生活や職員に対して肯定的な(施設に来てよかったという)気持ちに有意に影響することが明らかになった。</p>
<p>(2)「児童養護施設の職員が長く働き続けられるための条件—勤続職員と退職職員への同時調査からの視点—」</p>	<p>単 著</p>	<p>2011年12月</p>	<p>日本福祉大学 社会福祉学会 『福祉研究』 No.103, p. 65-76</p>	<p>子どもの安心な生活の保障は職員との安定的な関係性を保障することであると考えられる。しかし児童養護施設において、職員が長く働くことができない実態がある。そこで退職した(元)職員と現在働いている職員への実態調査をもとに、職員がいかに長く働き続けられるか、その理由や条件などについて明らかにした。その結果、結婚をしても継続して働ける環境があれば、多くの職員が退職せざるを得ない状況から抜け出せることを見出すことができた。</p>
<p>(3)「児童養護施設での生活経験のある者からみた『よい職員』とは—入所児童と退所児童へのアンケート調査の結果から—」</p>	<p>単 著</p>	<p>2012年3月</p>	<p>『金城学院大学 論集人文科学編』 第8巻第2号 p. 180-192</p>	<p>施設生活経験者(入所児童・退所児童)へのアンケート調査結果を報告。施設生活経験者の思いや意見を聴き支援につなげることで、施設生活経験者の声は施設や職員の取り組みの評価であると捉えることが重要だと述べた。また施設生活経験者から見た「良い職員」の具体像や、施設職員に望むことなど、児童養護施設職員を目指す学生への参考となるような職員の具体像を提示することができた。</p>

<p>(4)「子どもの成長と記録—継続的な関わりを保障するために—」</p>	<p>単 著</p>	<p>2014年7月</p>	<p>子どもと福祉編集委員会『子どもと福祉』vol.7, 明石書店 p.56-57</p>	<p>施設で生活する子どもにとって記録はその子どもの歴史を刻む重要なものとなる。本来ならば、安定的で継続的な養育者との関係性が望まれるが、養育者の入れ替わりやすい環境の中でいかに継続的な視点で子どもの成長を見守ることができるかという観点から、記録の必要性を述べた。また、書き方の工夫や書く視点など、直接的な支援ではない職員の専門性についても言及した。</p>
<p>(5)「生い立ちの整理に取り組む意味とは」</p>	<p>単 著</p>	<p>2015年7月</p>	<p>子どもと福祉編集委員会『子どもと福祉』vol.8, 明石書店 p.52-53</p>	<p>児童福祉施設で生活する子ども自身が家族や両親のこと、施設で生活する理由を知ることは非常に意味がある。つまり子どもの生い立ち整理は、社会的な自立を促していく上で非常に重要だといえる。本稿は、施設が組織的に子どもの生い立ちの整理に取り組むことの意味や子どもの気持ちに寄り添いながら一緒に取り組む職員の存在と、支える職員集団のあり方について浮き彫りにした。</p>
<p>(6)「児童福祉施設で働く新任職員への実態調査」</p>	<p>単 著</p>	<p>2016年5月</p>	<p>岐阜県児童福祉協議会『児童福祉ぎふ』No.52 p.123-136</p>	<p>施設の地域分散化や小規模化により、家庭的養護が推進されている中で、人材確保・育成が課題として挙げられている。岐阜県内でも小規模化へ移行する施設が多く、人材の確保・育成に対する積極的な取り組みは必要であろう。そこで児童福祉施設で働く新任職員(入職1年未満)に対して、学生時代の学びや得たこと、学生時代に身に付けておくべきこと、仕事のやりがいや現在抱えている課題など、実態調査をおこない結果の報告をした。</p>

<p>(7)「地域とつながることの意味を考えるー児童養護施設と地域の関係性ー」</p>	<p>単 著</p>	<p>2016年6月</p>	<p>社会福祉法人全国社会福祉協議会全国児童養護施設協議会『季刊児童養護』Vol.47No.1 p.16-19</p>	<p>『地域福祉と児童養護』がテーマ。子どもと地域をどのようにつなげていくのか、本稿は勤務している施設の現状を基に、施設行事で地域と協働した取り組みや、日常生活(挨拶や趣味を通じた関わり)での交流を紹介した。その上で、地域と施設がどのようになっていく必要があるのか、つながる事の意味について、施設内虐待の事例や卒園生の語りなどを通して検討した。</p>
<p>(8)「児童福祉施設で働く新任職員の仕事に関する実態調査ー人材確保と育成に関するー考察ー」</p>	<p>単 著</p>	<p>2016年7月</p>	<p>子どもと福祉編集委員会『子どもと福祉』vol.9, 明石書店 p.100-111</p>	<p>児童福祉施設の新任職員(入職1年未満)への調査結果(児童福祉ぎふNo.52)から、人材確保・育成の取り組みにつながるための具体的な視点を考察した。確保については、学生時代の体験的な学びが現在の仕事につながっているという結果が得られた。育成については①継続的に働くことができる職場環境の整備②具体的な人材育成のあり方の検討③大学との連携と施設実習のあり方を検討の3点が浮き彫りとなった。</p>
<p>(9)「社会的養護における職員の確保・育成」</p>	<p>単 著</p>	<p>2018年7月</p>	<p>子どもと福祉編集委員会『子どもと福祉』vol.11, 明石書店 p.34-37</p>	<p>本誌特集1「社会的養護における職員の確保・育成」について児童福祉施設関係者から投稿いただいた実践レポートを、自らの調査研究結果もふまえてまとめた。投稿された6つのレポートを(1)職員確保の課題(2)職員育成と研修の課題(3)職員の定着に向けた課題の3つの視点から総括した。それらの課題を改善していくためには、施設・法人の取り組みだけでは限界はあるものの、各施設がそれぞれの特色をいかしながら工夫して取り組まれている実情が浮き彫りになった。</p>

<p>(教育実践記録等)</p> <p>(1)保育実習 I (施設実習)の事前指導に関する一考察—外部講師の講義が学生の意識に与える影響とは—</p>	<p>単 著</p>	<p>2018年2月</p>	<p>滋賀文教短期大学『滋賀文教短期大学紀要』20号 p. 26-34</p>	<p>保育実習 I (施設実習)に参加する学生の多くは、施設実習指導や社会的養護等の科目において施設の現状やその内容について学んでいる。しかし不安を抱えたまま実習に向かう学生もいる。そこで、社会福祉施設で勤務する職員等の講義が、学生の意識にどのような影響を与えるかについて検証した。その結果、外部講師による具体的な講義や演習での取り組みが、実習に対する不安軽減と、社会福祉施設への興味・関心の高まりにつながるといった結果が得られた。</p>
<p>(その他)</p> <p>(研究会等発表)</p> <p>(1)第1回ライフストーリーワーク実践・研究全国交流研修会シンポジスト</p> <p>(2)第43回全国児童養護問題研究会全国大会分科会 講師</p>		<p>2013年2月23日</p> <p>2014年6月29日</p>	<p>LSW 実践・研究交流会実行委員会 兵庫：神戸女子大学</p> <p>全国児童養護問題研究会 愛知：ウインク愛知</p>	<p>社会的養護の下で暮らす子どもたちの「出自」をどのように扱い、「生き立ちの整理」をどのように行っていくのか、児童養護施設で取り組んだ中学生女兒の事例を基にシンポジストとして実践報告を行った。真実告知をした後の支援が重要であることや、その支援する職員の支援も重要であること、子どもの成長を語る職員（大人）の存在が、子どもの自立にどうつながっていくのかを説明した。</p> <p>第6分科会『青年期の自立支援—子どもの生き立ちを振り返る—』で実践報告を行った。子どもが自の「生き立ち」と向き合う際、職員はどのようなことに配慮すべきかを副題とし、施設内での支援のみならず、関係機関や教育機関との連携も含めた支援が必要であり、それらを構築していくことができる職員集団のあり方についても言及した。</p>

<p>(3) 児童相談所と近接領域における家族療法家族援助の実際 第25回研修会 岐阜 話題提供者</p>		<p>2016年2月 20日</p>	<p>児童相談所と近接領域における家族療法・家族援助の実際研修委員会 岐阜：じゅうろくプラザ</p>	<p>社会的養護の下で生活している子どもにとって、生い立ちを振り返る取り組み「ライフストーリーワーク(LSW)」の実践は、子どものよりよい自立を促し、自己肯定感を高め、家族イメージをつくるきっかけとなる取り組みである。児童相談所と取り組んだ小学4年生男児のLSW事例を提供し、職員と子どもの向き合い方を参加者と考えると共に、職員相互がつながることを意識しながら、子どもの支援に携わることの大切さを報告した。</p>
<p>(4) NPO法人なごやかサポートみらい法人 設立2周年記念講演会 コーディネーター</p>		<p>2016年2月 27日</p>	<p>NPO法人こどもサポートネット あいち 愛知：勤労会館東館</p>	<p>児童福祉施設で生活する子どもの社会的な自立に向けて、支えてくれる「人」の存在の重要性について、児童養護施設での勤務経験を語りながらフロアとの意見交換をコーディネートした。社会に出た後も、失敗を許される環境を用意すること、それでも支え続けてくれる人の存在を大切にすることなど、施設職員や関係機関が、子どもの社会的な自立を支えていくために必要な多くの視点を見出すことができた。</p>
<p>(5) 平成30年度全国保育士セミナー 話題提供者</p>		<p>2018年9月 14日～16日</p>	<p>一般社団法人全国保育士養成協議会 岐阜：長良川国際会議場</p>	<p>第10分科会『施設職員としての専門性を高める施設実習のあり方を考える』がテーマ。新任施設職員(入職1年未満)のアンケート結果(児童福祉ぎふNo.52・子どもと福祉vol.9掲載)から、新任職員の実態と養成校に求めることを報告した。また児童養護施設で学生を受け入れていた経験もふまえ、保育士養成校の講義内で取り組んでいる事例(自分史の作成、料理体験報告等)の取り組みを紹介した。また支援が必要な家庭から入学している学生もいるため、講義内容や伝え方の工夫についても言及した。</p>